

# 子育て文化史のなかの

## 「伝統」と「近代」

太田 素子

### 現代日本のなかの異文化衝突

先日電車の中で、少し心にひっかかる光景を見た。

三〇代はじめと思われる母親に連れられた五歳くらい  
の男の子が電車に乗ってきたときのことである。座る  
席がないのを察して彼がぐずると、初老の女性がニコ

ニコ立って自分の席を譲った。母親は一瞬ハッと困っ  
たような表情を見せたが、息子の方はえびす顔になっ  
てさっと座ってしまった。あつという間の出来事だっ  
た。母親も老女の好意を無にできないと観念したの  
か、「子どもは立っていなさいいけないのよ」といい  
ながら、「おばさんは優しいねえ。ちゃんと御礼を言

いなさい」——追認するのがやつとという表情だった。

最近では、この初老の女性のように子どもに席を譲る大人は珍しい。子どもはエネルギーで体も軽い。のだから立っているのが当たり前、大人に席を譲ることを教えなければというしつけの基準は、おそらく戦後欧米から学んで日本社会に定着したものだと思われるが、しつけの基準としてはすでに相当一般化していると考えて良いのであろう。しかし、ぐずった子どもにニコニコと共感し席を譲る人の良さ、子どもに対する寛大なやさしさと甘やかしは、私たちの文化に深い根付きを持っていて、見ていた筆者も感覚的には彼女の行動が理解できないわけではなかった。こうしたやさしさは、今日においてすら形を変えながらもいろいろな現れ方をして、大人と子どもの関係の一翼を形成しているのではないだろうか。

永年ドイツで暮らした自然科学者の友人が帰国して日本で生活し始めたとき、「日本の食品の味覚は全体

として子どもの味覚

に迎合しているの

はないか。家族向け

と考えられている事

の中心は、実は子ど

も向けようだ」と

いう感想をもらした

のを聞き、大変面白

いと思った。あいに

く味覚については、その当否を判断する材料を持ち合

わせていないが、かつて土居健夫氏が『甘えの構造』

のなかで言及した幼児語の存在など、日本文化は確か

に子どもに対する共感的な配慮に満ちているのではな

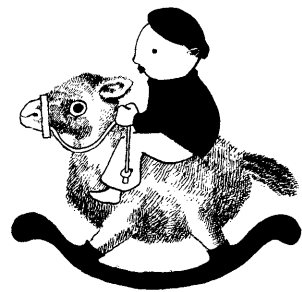
いかと思う。

魚を「おとと」、ご飯を「まんま」といいかえるよ

うな幼児語の存在は、欧米社会には見られない現象だ

という。その背後にあるのは、子どもの意図や表現能

力の水準に対する共感的で寛大な配慮であろう。子ど



もの認識と感情への共感、家族がお互いを「お父さん」「お母さん」「おばあさん」などと、子どもとの関係を基準に呼び合うような呼称のあり方にも見ることができる。日本の家族関係は、子ども中心の共感関係に大きな特徴があると思われるのである。

しかも、このようなしつけにおける優しい甘やかしや子ども中心の共感的な家族関係は、実は家族や子育てのみならず、日本社会の人間関係全体をおおう特色でもあるらしい。しつけと人間形成の日米比較を行った東洋ほかの共同研究によると、日本の母親は概して「相手の気持ちを思いやる」事をしつけの基準として強調するのに対し、アメリカのしつけにおいては、社会のルールは「ルールだから守る」という約束ごとと自体を基準として強調するという。そうなると、これは大人―子ども関係に留まらない、社会の規範のあり方の日米の差異と考えて良い。そして、冒頭に紹介したような子どもへの親切な対応は、実は規範欠如なのではなく、日本の規範のあり方自体から派生する、しつ

けについての別の方法原理を伴ったものであることが予想される。

おそらく日本の社会においては、長い間大人と子どもとの温かな情緒的關係こそが、「大人しい」、相手の気持ちを察して行動をコントロールできる賢明な人格を育てる土壌だと信じられていたのではないか。大人がむずかる子どもに親切なのは、その対応を通して他者に関わる関わり方を子どもに伝えているのだともいえる。電車の中のマナーを合理的に理解させるようなしつけから考えれば、むずかる子どもに席を譲ることは、マナーやルールの合理的理解に混乱要因を持ち込むことに他ならない。しかし、相手の気持ちを思いやる優しい人格を育てる観点からいえば、この初老の女性の行動は子どもに対して模範を提示しているといえなくもないのである。

しかし、冒頭にもふれたように、既に子どもに席を替わろうと考える日本人は少数派であろう。また、大人が優しく接すれば子どもが優しい人間に育つという

ことを、そのままでは期待できないと考える点でも、大方の常識はかつての時代とは変化していると思われる。かつての時代——それがいつのことなのかは、大きな検討課題であるとして——とは、おそらく子どもをとりまく周囲の事情が全く異っているのだ。

しかし、だからといって伝統的な大人—子ども関係が全く消失したのでもない。例えば、愛する大人に養われることが嬉しくて喜んで立とうとする子どもに育てるような、共感関係を土台とする情緒的で柔らかいしつけが、いまでも日本人は得意なのかも知れない、と思う。

以上、長々としつけの現状に触れたのは、実はしつけも含め子育ての大きな変動期にあると感ぜられる現状を、どうしたら子育て文化の歴史研究の遡上に乘せて考察の対象にできるのか、その方途をさぐりたいがためである。

子育ての文化を比較研究する方法には、先にも少しふれた心理学的な方法、また社会学、文化人類学など

空間的な方法とともに、歴史学や民俗学など時間的な比較の方法がある。それらが近年はお互いに深く影響しあつて文化研究を活性化している。こうした状況については、また機会を改めて考えたいが、筆者はP・h・アリエスやJ・L・フランドランによって拓かれたフランス、アナル派の心性史研究や、J・ルゴフの人類学的歴史研究という提案を、子育ての文化史研究に即して引き受けることができないかと考えている。実は冒頭に紹介した小さな経験を、新旧二つのマンタリテの衝突だと感じたのは、こうした筆者の研究関心に基づく感想だったかも知れない。

しかし、とはいえ、「新旧二つのマンタリテ」をどのような性格のものと定義するかは、筆者にとつてはまだ霞の向こうの世界を説明するような困難を感じる。今回は、これまでに着手した幾つかの実証的な仕事を念頭に置きながら、しかしそれらを少し離れて無理を承知の粗っぽいデッサンを試みようかと思う。

## 子宝思想——〈共感〉と

### 〈可愛がり／＼禁欲〉の子育て

日本の前近代社会を代表する子育て思想として、貝原益軒『和俗童子訓』を取り上げるのは、それ程的外れではないだろう。

かつて松田道夫氏は、『和俗童子訓』を現代にも有意義な知恵と高く評価し、自らその口語訳に手を染めて普及に貢献しようとした。そのさい氏は解説のなかで、益軒の〈禁欲〉と〈孝〉概念をとりあげ、江戸時代がエコロジカルな平衡を保ち平和と福祉を推進したことに貢献した思想として、これを積極的に評価している。

また、石川松太郎氏は益軒を「東洋のルソー」とシボリックに評した。それは、益軒が『和俗童子訓』において、年齢に従ったしつけや学習内容を列挙したからで、発達の様相の観察が詳しい点において「子どもが発見者」ルソーと対比したわけである。確かに十

八世紀日本は子どもの発達にこまやかな関心を寄せ始めた社会であった。その意味では、注意深い子育てをめぐす子育て文化の近代化へ向けた離陸のはじまりである。しかし、発達の理解そのものについても両者の間にはまだ質の差があるし、何よりも目標とする人間の差異は決定的である。

ルソーは『エミール』第五巻で、男女の教育目標の差をこう語る。

「女子の教育法は、こういう点では、男子のそれとは反対にならなければならない。人々の意見というものは、男性にとっては美徳を葬る墓場になるのだが、女性にとっては、美徳の光栄の座になるのだ」。したがって女子については、「人々の判断に服従することをつらく思わないように、育てなければならぬのだ」と。

他人の意見にめげずに自己主張するような、個の強さこそが求められる男子と、他者の意向に従順に素直に生きるべき女子の資質の違いは、ルソーが現実にリ

アルに応えようと考察して得た結論であった。男子は  
いったんは家族や共同体を飛び出して自己実現の道を  
模索せねばならないが、女子にはその条件がない、一  
生涯近隣の間関係の中で生きて行くことが宿命な  
ら、それにふさわしい人間に育てねばならないと彼は  
考え、論じているのである。ということは、当時男女  
別に語られたこの人間像の違いは、実は流動的な社会  
に生き、出会いと実力のみが人生を切り開くような近  
代社会を生きる人間と、土地に定着して狭い世界で生  
きる伝統社会の人間像の差をも描き出しているといえ  
ないだろうか。

ルソーは、エミールに託して近代的な人間形成の方  
法原理を考察した。乳幼児期について言えば、彼は、  
子どもの自主性を育てながら我侷にしないことはどう  
したら可能かを課題として追求している。いっぽう、  
益軒が『和俗童子訓』で強調する方向性は、松田氏の  
指摘の通り、禁欲と「孝悌の道」の教えである。益軒  
は子どもが「欲を恣にしない」為にこそ幼児期の教育

が大切だという。そし  
て、可愛がりすぎず、  
誉めず、「三分の飢え  
と寒」をもって、万事  
足りない目に育てるが  
良いと説いている。

「孝悌の道」が、家共  
同体のなかで生きる素  
直さ、親しみ、恭順と

いった価値を求めるものであることについては、改め  
て説明するまでもないだろう。『和俗童子訓』は「現  
代に通ずる」価値というよりは、全体として家共同  
体の後継者養成に向けた子育て文化を本旨としている。

ところで儒者が「可愛がりすぎず、誉めず、万事足  
りない目に育てよ」と説く背景には、現実には可愛が  
りすぎ、与えすぎの育児が拡がりつつあったからなの  
かもしれない。近世子育て論のルーツは武家家訓に求  
められるが、家訓は「家」が政治や軍事、経済など社



会の単位として重要な役割を持ち始めた武家社会の初期、十三世紀頃から書き始められた。つまり子育て論は、家の後継者養成の実践と共に成立、発展してきたものなのである。家訓に盛り込まれた子育て論は、戦時には厳しく、平和な時代には豊かめに、家の後継者を育てる知恵が書きつがれたが、近世になると庶民まで含めて、小規模の自分の家を持つ可能性が飛躍的に増していった。隷属身分である譜代奉公人が次第に影を潜め、武家においても農工商人の家においても、一定の年季の後、あるいは日中の勤めの後は二世代、三世代から成る小規模な家族生活を享受するような社会になったのである。こうして、庶民も家の後継者として子どもに希望を託す時代を迎えた。「子にカカル」という意味での子宝意識は、家が生産単位であった時代の、経済的関心と情愛が未分化な子育て意識である。先に、日本の伝統的な子育て文化は、子どもに対する共感と可愛がりに満ちたものだったのでないかと指摘した。それは、このように伝統社会の子育てが、

小規模な直系家族によってになわれてきたことと関わりがあるように思う。ルールを必要とするような利害対立は単純には明らかに成らず、しつけは他人の気持ちへの思いやりという共感的な方向へ向けられる。産業の多忙な現場でもあった家の中では、親切な面倒見の良さが過保護に傾くことはあり得ず、むしろ親には是非必要な資質であったかもしれない。温和な優しいしつけは、日本の風土や狭い地理的条件などのなかで長い時間をかけて作られてきたのではあろうが、江戸時代を通じて直系家族の子育て文化として熟成したものではないかと思われるのである。近世子育て論は、こうした武士や上層町人の子育てを母胎として生まれ、ともすれば情愛に流されかねない直系家族の子育てに対して、家の後継者として禁欲と孝梯の子育てを勧めている。

### 形成途上にある〈自立〉を核とする子育て文化

それでは、近代の子育て文化は、どの時期にどのよ

うな子育て実践を母胎として、形成・発展してきたのである。残された紙幅は本当にわずかなので、研究の見取り図だけでも記しておきたい。

家や共同体に留まる人格ではなく、自身の生き方を選択しつつ生きる自主的人格の形成を助ける方法原理は、植木枝盛の「青幼論」、若松賤子の「子供について」など、論としては明治中期から説かれている。しかし、こうした思想家レベルではなく、女学校を出て家庭に入った女性達が、育児書と首引きで新しい育児に取り組むようになるのは、二〇世紀にさしかかった明治後期から大正時代にかけてであった。地縁血縁ではなく、学歴と学校縁に依拠し、都市で俸給生活を始めた新中間層の単婚小家族（核家族）から、近代的な子育て文化が生まれる。これら新中間層の子育て文化については、本誌の前身、『婦人と子ども』『幼児教育』誌に掲載されたしつけ論や子育て記録が、豊かに語りかけてくれるところである。

しかし、農山漁村など地方に住む国民の過半が家業

表 「子育てにおいて大切にしたいこと」

対象の子どもの出生時期 (事例総数)	1920年以前 (10)	1921～40年出生 (6)	1941～60年出生 (52)	1961年～出生 (51)
①目標や人間像				
・他人に迷惑をかけない	0%	66.7%	17.3%	23.5%
・他人を思いやれる人	0%	16.7%	7.7%	27.5%
・自立と自己責任能力	0%	0%	9.6%	17.6%
②規範の内容				
・挨拶・礼儀	10.0%	33.3%	21.2%	25.5%
・手伝い・家事分担	10.0%	50.0%	30.8%	2.0%
・善悪の判断	10.0%	0%	5.8%	15.7%
③しつけの方法と 親子関係の特徴				
・習い事の選択や習慣化	0%	16.7%	1.9%	13.7%
・信じて育てる	0%	0%	7.7%	5.9%
・絵本や芸術教養	0%	0%	1.9%	11.8%



から離れ、才能とキャリアによって自立の道をめざすような人格形成に向かったのは、二〇世紀も後半の高度経済成長の過程を通じてであった。筆者は、一九九一～五年まで学生に「わが家三代の子育て」という聞き取りレポートを課し、その中で語られたしつけの①目標や人間像②規範の内容③しつけの方法と親子関係の特徴、について数量的に数えてみたことがある。すると、例えばそれぞれの上位三項目だけを取り上げても表のように、団塊の世代とその子ども世代の間で、家の手伝いをする子どもから自主性を重んじ習い事や教養を身につけさせる子育てへの大きな変化が起こっていることが分かるのである。聞き取りの内容からは、さらに具体的にこの変化——東北農村の貧困の中で、取り立てて「しつけ」を意識されなくても、必死に家事を手伝い貧困と闘う生活の中で生み出された人格形成と、親の強い教育関心の元に、注意深く育てられた人格形成の違い——を理解することができる。庶民の生活と子育てのレベルで、「忍耐と協調の子育て」から「自立と才能にむけた子育て」への変化が、

ドラスティックに展開されているといった印象だ（拙稿「研究ノート・子ども像と子育て意識の現代史」

『共栄児童福祉研究』第五号、一九九八・三）。

ところで、高度経済成長長期、第二の都市化の波のなかで、日本の核家族比率は高まり、教育関心の強い子育てはその核家族を中心な母胎として生み出された。しかし、その後、女性の社会参加の一般化や高齢化・少子化時代が到来し、家族は再び大きな変動を経験している。おそらく家族構成員一人一人の自立性の強まりが一層進み、そのことで人間の情愛や関係性も質が変化するのであろう。「近代家族」の歴史的役割に陰りが見えたところで、「自立」を核とする子育てはかえって成熟してゆくのかも知れない。

（共栄学園短期大学）